

文章読解・作成能力テストを利用した「日本語リテラシー A」科目の成果と課題 ——長崎ウエスレヤン大学における教育実践レポート——^{1*}

吉 野 浩 司^{**}

Educational Practice Report of the “Nihongo Literacy A” in Nagasaki Wesleyan University:
Some Achievements and Problems by using the Proficiency Test “Bunshoken”

Koji YOSHINO^{**}

問題設定

地方小規模大学への入学者は、大学の所在地ないしその近隣地域の出身者が多数を占めている。しかも、これまで必ずしも社会的、経済的、文化的に、良好な学修環境で育てられてきた学生ばかりというわけではない。むしろそうでない場合も少なくない。日本は、2009年以降、大学全入時代に突入したといわれている。全国的に大学の初年次教育の必要性がクローズアップされるようになったのは、このころからである。初年次教育の段階で、いかにして学生を大学生活に適応できるようにし、基礎学力と学習態度の定着へと導くのか。それが地方小規模大学の共通した課題となっている。

そうした地方小規模大学の取り組みの実践例として、本稿では、長崎ウエスレヤン大学（以下、「本学」と略記）の取り組みを紹介したい。なかでも、学びの根幹となる大学の国語力教育の実践例から見てくる、地方小規模大学の置かれている現状と、課題解決に向けた取り組みとを紹介することにした。それには、これまで社会的、経済的、文化的に恵まれた環境で育ったわけではない学生が、焦点となるだろう。わけても国語力が相対的に低い学生の学力向上モデルを提示すること、それが本稿の課題である。

1. 本学の基盤教育センターと「日本語リテラシー A」科目の位置づけ

2015年度より本学では新カリキュラムが導入された。その中でも特に力を入れているものの1つが、Firstプログラムである。これは、初年次、特に1年前期という早期の段階で大学生としての修学態度、生活態度を身につけることを目的とするものである。これを担当するのが、筆者が属している基盤教育センターである。

基盤教育センターの仕事は大きく分けて、3つの柱から成り立っている。まず1つ目が初年次教育、2つ目がキャリア教育、3つ目がコミュニティサービス・ラーニング（以下、「CSL」と略記）の運営である。センター所員は2名で、これに学部からセンター長1名、センター委員2名を組み入れて、計5名で運営されている。一般的に、上記の3つの分野は、それぞれ別の部署が担当するものであろう。しかし本学では、それらの基幹的な部分を、基盤教育センターで統括して運営している。そうすることで、初年次教育、キャリア教育、CSLといった教育プログラム間の連携をはかるといのが、その大きな狙いである。これは小規模大学だからこそできるメリットであろう。

CSLは、初年次教育（1、2年）の段階から必修で行われる。全教員、全学生がどれか1つのプログラムを行うことになっている（3年次からは学科の選択科目となる）。地域での様々な活動を通じて、地域の現状を知り、現場の問題を発見し、課題解決に取り組むこと。さらには現場での実践的な活動により、チームワークやリーダーシップを身につけること。そうしたことが目指されている。基礎的、あるいは専門的な知識を、経験と結びつけて理解できるようになるのが理想である。しかも社会貢献活動を経験することによって、自らの個性や長所を実感することとなる。それにより自分に合った就職先を見つけたり、就職後のキャリアプランニングを立てたりすることが、学部の早い時期から可能となる。

そして、これらの実践的な学修を支えているのが、読み書きなどの基礎的な技術であることはいうまでもない。本学では、入学から半年間で集中的に行うFirstプログラムの中にそれが含まれている。例えば、外国語（英語ないし中国語より選

* Received January 12, 2017

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

択)のほか、情報通信技術の活用方法を学ぶICTスキルが、それぞれ週2コマで実施されている。そして本稿で主題とする「日本語リテラシー」も、学生の4年間の学びの基礎を支える科目の1つである。

「日本語リテラシー」科目は、全学科共通のシラバスを持つ「日本語リテラシーA」(以下、「リテA」と略記)と、学科別に個別のテーマを扱う「日本語リテラシーB」とに分かれている。このうち語彙を増やし、作文能力を高めるのが、「リテA」の課題である。一方、「日本語リテラシーB」の方では、より学科の専門性を生かした教材の選定と教育の実践がなされている。

本年度より「リテA」では、漢字検定協会が実施している「文章読解・作成能力検定」(以下、文章検と略記)を主軸に据えたシラバスを作成した。このテストを利用することになった理由は、下記の通りである。第1に、漢字検定の語彙に対応する文章力テストであることから、語彙力にそくした文章力の向上がはかれること。第2に、他の国語力関連の検定試験にはない、記述式の文章作成問題があること。また第3に、その文章作成には、採点基準となるフォーマットが定められており、それに沿った客観的な採点が可能であること。そして第4に、手紙文や公文書に関する問題があること。

このように、語彙力、文章読解力のみならず、主観的な評価に傾きがちな文章作成の採点基準を、客観的に評価できるという設問があること、それが、このテストを採用した理由である。

2. 文章検の特徴

しかし現代の大学の国語力教育に求められているものは、学生の国語力を正しく把握し、適切に指導していくということだけではない。学力の把

握、そして指導の根拠となっている、学生の伸びを測るための指標を明確にし、能力を数値化して公表できるものとしなければならない。教育内容をリフレクシブにフィードバックするための判断材料として、検定試験を活用しようという動きが全国的に見られるようになった。これが、いわゆる大学教育の質保証のための「エビデンス」の確保である。有効な「エビデンス」を得るためにも、大学内の講義で検定試験を利用することが有益だと考えられるようになってきている。広く行われている検定試験であれば、それだけビッグデータの蓄積があり、また実施のノウハウも整備されているということになる。

例えば大学における英語教育の分野では、すでにTOEICや英検を利用した教育の実践例が、数多く報告されている(島谷,2013)。また、より広範囲で長期にわたる、学生のジェネリックスキルを測るテストもある。それが河合塾とリアセックが共同開発した、PROGテストである(PROG白書プロジェクト編,2016)。

これらのテストに対しては、むしろ懐疑的な見方や批判的な意見がないわけではない。しかし、かといってこれらに代わるような有用なテストがあるわけではない。そうしたことから各大学は、テストそれ自体の有効性の検討²を含めつつ、実用的に運用していくということ以外に、今のところ選択肢はない。それが教育現場の大方の意見であろう。

国語力を伸ばす教育についても同じことが言える。外部のテストを利用することなしに客観的に学生の国語力の伸びを把握することは、現状において難しい。それでは、国語力を試す試験としては、どのようなものがあるのだろうか。いくつかの大学が採用しているテストの一例を挙げるなら、下記のものがある。

第1表 国語力関連の検定試験

検定試験の名称	実施	講義での利用大学
語彙・読解力検定	朝日新聞、ベネッセ	新潟医療福祉大学・九州工業大学・大正大学 など
日本語検定	特定非営利活動法人 日本語検定委員会	前橋国際大学・比叡山大学・法政大学 など
国語力検定	Z会	昭和女子大学・京都造形芸術大学・目白大学 など
文章読解・作成能力検定 (旧日本語文章能力検定)	公益財団法人 日本漢字能力検定協会	広島経済大学・大阪経済法科大学・九州情報大学 など

※利用大学は各検定試験のHPを参照

¹ 本稿は、2016年11月17日(木)に一橋大学で行われた「＜教育と社会＞研究会」での報告原稿をもとに作成された。そこで交わされた質疑応答は大変有益であった。司会の山田哲也氏(一橋大学)、コメンテーターの谷口利律氏(東京海洋大学)、ならびに研究会の参加者に、この場をかりてお礼を申し上げたい。

² 例えば下記の事例で取り上げる学生でいうと、2名の学生のPROGリテラシーテストのレベルが、実力より低く出ているように思われる(No.34およびNo.51)

各検定試験には、それぞれ特徴があるものの、語彙力や漢字力、文書読解能力を試すということについては、いずれにも共通しているといえるだろう。これらの検定試験のなかでも、とりわけ作文力に力を入れているのが、文章検である。決まった文章作成フォームにそくして書かせた作文を、独自のチェック項目に従って採点するという方式が採用されている。この基準にそくして文章を作成すると、述べる内容を順序だてて書くこ

とができるように作られる。採点者の側からいうと、採点に主観が入り込む余地が少なくなる。それと同時に、採点作業の負担も軽減される。そうした理由もあり、語彙力の増強とともに作文能力の育成を目指す、本学の「リテA」には、この文章検が最適であると考えたわけである。

レベル設定としては、さしあたり文章検3級を利用することに決めた。文章検の公式ホームページによると、3級レベルの内容は下記の通りである。

第2表 文章検3級の内容

高校での積極的な理解・表現活動、知的言語活動のために、あるいは、実社会におけるコミュニケーション活動を行うために必要な文章読解力及び文章作成力。		
基礎力	語彙	漢検3級程度の語句・慣用表現の意味が理解でき、文脈や意味に応じた語句・慣用表現を選別できること。
	文法	表現において、文法的な違いが果たす意味・役割を理解できること。
読解力	意味内容	段落や文章の要旨を理解できること、及び、筆者の意図を理解できること。
	資料分析	資料から読み取れることを整理できること。
	文章構成	文章構成を把握し、筆者のねらいが理解できること。
作成力	構成	文章の材料や要素を、文章の目的に応じた構成に配列できること。
	表現	文法的・意味的に正しい文を書けること。／敬語を正しく使えること。／表記や文体に配慮できること。
	総合	「事実の報告」、「意見」、「意見の正しさの論証」の三つの部分によって、意見文を作成できること。／日常、必要とされる通信文を、与えられた条件のもとで書けること。

試験問題は、出題形式が決まっている。第1問は語彙と文法からの出題で、読解と作文のための基礎力を問う問題となっている。第2問と第3問は、読解力を試す問題である。第2問では、図表の読み取りの問題が出される。第3問は、内容と形式の面から文章を読解する問題となっている。通常の内容理解のほかに、各段落の意味を問うパラグラフリーディングの問題もある。いざ自分が作文するさいには、パラグラフの内容と展開にぶれが生じないように、意識を集中しておかなければならない。それに気づかせるための読解の練習問題ということもできるだろう。以上の設問で90点の配点がある。

続く第4問では、手紙文の知識を問う選択問題と、正しく修正させる筆記問題とが出される。手紙でフォーマルな文章を書く経験の少ない現代の学生にとっては、とっつきにくい問題であるといえるかもしれない。配点は40点である。

そして第5問が、500字以内（376字～500字）の意見文の作成となっている。3級の場合、作文の構成は3段落で、それぞれの段落に指示通りの記述がなされていなければならない。例えば第1

段落には「出来事・体験・知識」を、第2段落には「意見」を、第3段落には「意見の正しさの説明」を書くようにとの指示がある。指示された形式にそって書かれていなければ、減点の対象となる。逆にいうと、出題に沿って答えていれば、解答内容は自由である。以上の所で、70点の配点となっている。

以上計200点満点のうち、140点以上の得点により文章検3級の資格が得られることとなる。

3. 文章検を用いた「日本語リテラシー A」の講義内容³

2016年度の「リテA」で用いた教科書は、いずれも漢字検定協会が出している、3級対応のテキスト『基礎から学べる文章カステップ』および文章検3級の『公式テキスト』である。教科書は、テストの出題形式にそくして構成されており、語彙をはじめ、文章読解やパラグラフリーディングの方法、文章作成のためのブレンストーミングのやり方などが解説されている。シラバスは、ほぼこの教科書に基づいて作成された。

³ 文章検に関し、2016年9月29日14:00～15:00の日程で、広島経済大学の木本一成氏より聞き取り調査を行うことが出来た。長年にわたる文章検の大学の講義での利用について、貴重な意見をうかがうことができた。この場を借りて、お礼を申し上げる。

第3表 2016年度 「日本語リテラシー A」 シラバス

講義の概要			
<p>文章を「書く」力というのは、大学における学修や、これからのキャリア形成など、あらゆる活動における基礎となるスキルとなる。本科目では、1年次の基礎演習で取り扱う、アカデミックスキルおよびスタティスキルの土台となる、「書く」力の基礎的能力を修得することを目的とする。具体的には、レポートや活動計画書、学習成果報告書等を記述するために必要な基礎的能力と、そのための漢字力および語彙力を身につけることになる。</p> <p>また1年次前期という初期の段階で、日本語の文章作成方法を集中的に学ぶことにより、文章表現力養成のためのリメディアル教育としても位置付けうるものである。本科目は、初年次教育プログラム（Firstプログラム）を構成するもので、2年次以降の学習効果の向上ともつながっている。</p>			
講義等の計画			本稿で用いる資料
第1回	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション ・国語力テスト（第1回テスト） 	<ul style="list-style-type: none"> ・国語力テスト（文章作成問題を含む） 	<ul style="list-style-type: none"> ・国語力テスト（第1回テスト）
第2回	<ul style="list-style-type: none"> ・開講時アンケート ・テスト解答・解説 	<ul style="list-style-type: none"> ・文章検の概要説明 ・予習復習のやり方、目安となる授業外学習時間 ・宿題ノートの作成方法の説明 	<ul style="list-style-type: none"> ・開講時アンケート
第3回	<ul style="list-style-type: none"> ・意見文とは何か 	<ul style="list-style-type: none"> ・事実・意見・感想の違い ・事実を思い出すトレーニング（p.52-55） 	
第4回	<ul style="list-style-type: none"> ・意見文の構成を知る① 事実を書く 	<ul style="list-style-type: none"> ・意見文における構成 ・まずは事実を書く（p.56-59） 	
第5回	<ul style="list-style-type: none"> ・意見文の構成を知る② 事実に理由と意見を加える 	<ul style="list-style-type: none"> ・次に理由を、最後に意見を述べる（p.56-61） 	
第6回	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に意見文を書く 	<ul style="list-style-type: none"> ・意見文を書く手順 「お花見のできる公園にゴミ箱を置くことの是非」（p.60-65） 	
第7回	<ul style="list-style-type: none"> ・書いた意見文を発表（プレゼン）する 	<ul style="list-style-type: none"> ・意見文を発表する 「お花見のできる公園にゴミ箱を置くことの是非」（p.66-67） 	
第8回	<ul style="list-style-type: none"> ・中間試験（第2回テスト） 	<ul style="list-style-type: none"> ・3、4級の問題より出題（語彙に関しては宿題ノートを参考にする） 	<ul style="list-style-type: none"> ・中間試験（第2回テスト）
第9回	<ul style="list-style-type: none"> ・試験の振り返り 	※国語力の伸びを自覚させる	
第10回	<ul style="list-style-type: none"> ・相反する意見文の比較 ・意見文への批判 	※準2級公式テキスト2章「読解力」（p.14-19）	
第11回	<ul style="list-style-type: none"> ・批判に対する反論 	※準2級公式テキスト5章「作成力（3）」（p.38-47）	
第12回	<ul style="list-style-type: none"> ・手紙の基礎知識 ・手紙で使う敬語 	<ul style="list-style-type: none"> ・手紙文①（p.42-45） 	
第13回	<ul style="list-style-type: none"> ・手紙の適切な表現、表記を知る 	<ul style="list-style-type: none"> ・手紙文②（p.46-49） 	
第14回	<ul style="list-style-type: none"> ・手紙文を書けるようになる 	<ul style="list-style-type: none"> ・手紙文③（p.50-51） 	
第15回	<ul style="list-style-type: none"> ・総括・全体の振り返り【まとめ問題】 	<ul style="list-style-type: none"> ・閉講時アンケートの実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・閉講時アンケート ・宿題ノート
後期試験	<ul style="list-style-type: none"> ・文章読解作成能力検定3級（第3回テスト） 		<ul style="list-style-type: none"> ・第3回テスト

「リテA」科目では、日本語の読解と作文を中心に進めたが、他の科目との関連性も常に配慮していた（資料1）。国語力は、あらゆる講義で用いる基礎的スキルだからである。特に学科別の専門的な文章を利用した要約や発表などを行う、「日本語リテラシーB」とは、合同講義という形でプレゼンテーションとディバートの講義を行っ

た。プレゼンテーションの回では、「リテA」で優れた意見文を書いた学生数名に、その内容を発表してもらい、その他の学生は、あらかじめ作成しておいた採点表に従って評価を行う側に回ってもらった。

同じくディバートの回では、「リテA」の2回分の講義で行ったワークを利用することができ

た。そのさいに参照したのは、1段階上の文章検準2級のテキストである。これは、自分の意見文を作るだけでなく、その意見文への批判と反批判を考えるものである。批判を想定した作文は、ディバートの発想と類似している。文章検準2級の作文問題が、批判と反論を必要条件としているから、ディバートの準備としても、たいへん有益であったわけである。ディバートの講義で用いるワークシート（資料2）を埋める作業を行うことで、批判と反批判の思考方法を身につけさせるようにした。

こうした読み書きの作業により、学生はクリティカルリーディング・ライティングの方法に親しむことができたようである。閉講時アンケート（資料4）では、印象に残った講義、ためになった講義として、ディバートの授業を挙げる学生が少なくなかった（記述式アンケートでは46人中14名がディバートについて言及している）。こうし

た思考方法と作文作成法は、これからの学びの基礎力となるとともに、卒業論文の作成はもちろん、社会に出てからも必要なスキルともなるだろう。

4. 3回のテストの結果から見た国語力の変化

2016年度「リテA」の受講者は、全部で54名であった。講義では、過去問を含む文章検3級のテストを3回にわたって実施した（第3回目の試験を受けたのは50名）。各回の平均点は、第1回目が61.9点、第2回目が62点、第3回目が69点である。

下記の表は、全受講者の3回の点数の推移を示している。ナンバーは受験者、各回の数字は、テスト（読解のみの点数）の得点から平均点を引いた数値である（平均より低い分だけマイナスの値が大きくなる）。上下の矢印は、得点が漸次、上昇傾向ないし下降傾向を示した学生を示している。

第4表 読解の点数の変化（得点－平均点）

No.	↑↓	1回	2回	3回	可否
1		29	18	25	合
2	↓	19	17	15	合
3		29	18	25	合
4		23	-13	25	合
5	↓	17	2	-1	不
6		7	23	—	未
7		7	-8	15	合
8		17	-2	9	不
9	↑	1	0	25	合
10	↑	-25	-20	-1	不
11		17	-7	9	合
12	↑	-15	18	25	合
⑭		1	-16	9	合
15		-19	2	-17	不
16	↑	3	7	15	合
17		—	-8	-43	不
18		-11	-29	-7	不
19		-19	—	-19	不
⑳	↑	-29	-10	-7	不
㉑		-9	-29	-17	不
22	↑	-29	-8	-1	不
㉓	↑	-33	-13	3	合
24	↑	-17	18	25	合
25		29	12	19	合
26		13	17	—	未
27	↑	7	13	15	合

No.	↑↓	1回	2回	3回	可否
28	↓	-3	-14	-43	不
29		13	17	15	合
30		-41	-14	-29	
31	↓	23	18	15	合
32		3	8	3	不
33	↑	-17	-4	19	合
③④		-3	21	-15	不
35		23	-14	15	合
36		-29	7	-1	不
37		23	2	19	合
38		3	-13	-7	不
39	↑	-29	-27	3	不
40	↓	-3	-24	-27	不
41		17	-33	5	合
43		17	-24	19	合
44	↓	-13	-8	-33	不
45		-39	17	15	合
46		-19	-10	9	合
47		17	24	15	合
48		29	33	19	合
49		7	23	15	合
50		23	-8	3	不
51	↓	29	18	-5	不
⑤②	↑	-9	2	9	合
53	↑	-1	1	9	合
54	↓	13	12	9	不

※数字に丸枠がついているものは、以下で取り上げるモデルケースとなる学生を示している。

5. PROGテストと文章検

上記の文章検の結果と、リアセックおよび河合塾が開発したPROGテストの結果を比較してみると、どのようなことが分かるのかを、ここで考えてみたい。

現在、多くの大学が採用しているPROGテストは、リテラシーとコンピテンシーの2つの力を測定する目的で行われている。このうちリテラシーテストの設問は、高校までの国語力のテストに類似するような設問も少なくない。公式ホームページに示されている、PROGテストのレベルとその内容を確認してみると、下記の通りである。

第6表 PROGテスト問題解決力のCan-Do-Chart

	レベル	
	1	• 適切な手段をもちいて、調べたい情報をさがすことができる。
		• 目の前で起きている問題が何であるかを理解できる。
	2	• 目の前で起きている問題を解決するための大まかな方向性は理解できる。
		• 目の前で起きている問題について、あるべき姿を想像することができる。
		• 日常的な出来事の利害関係を理解し、問題を解決する糸口を理解することができる。
	3	• インターネットを利用した情報収集の利便性と問題点を理解している。
		• 日常的な出来事について、上位概念と下位概念を区別することができる。
		• 日常的な出来事について、出来事の前後関係を推測することができる。
		• 日常的な出来事を、一定の観点にしたがって整理・分類することができる。
		• レポートを書くための手順を理解している。
	4	• 日常的な事柄について調査するとき、調査すべきデータの項目間の関係を理解することができる。
		• 日常的な概念について、概念とその機能・役割を対応させることができる。
		• グラフから読み取れる客観的な事実を指摘することができる。
		• 前後関係を理解しながら文章を読むことができる。
		• 段階をおって論理をつなげることができる。
		• 日常的な出来事について、自他を取り巻く環境について判断することができる。
		• 日常的なテーマについて議論するとき、議論を組み立てる順序を整理することができる。
		• 日常的な出来事について、それを実行する際のリスクを想像することができる。

学 士 到 達 レ ベ ル	5	• 社会的な出来事を、分野別に整理・分類することができる。
		• 社会的な出来事について、因果関係を想定することができる。
		• 情報間の関係を整理して、結果を推論することができる。
	6	• 出来事の数的な関係を整理し、結果を推論することができる。
		• 出来事について、与えられた情報をもとに、周辺状況を想像することができる。
		• 出来事について、隠れた本質を見抜くことができる。
	7	• キーワード間の関係を整理して、的確にキーワード検索することができる。
		• 文章を理解し、内容を構造化して、図示することができる。
		• グラフから得られた情報をもとに、出来事を構造化し、図示することができる。
		• グラフから得られた情報をもとに、因果関係を推論することができる。
		• 出来事について、レイヤーをそろえて解決策を構想することができる。
		• 出来事の構造を見抜き、主たる論点を抽出することができる。

レベルは1から7に設定されている。レベルが1から7へ進むにしたがい、より高度なリテラシーとなる。取り扱う事例が、「目の前の出来事」から「日常の出来事」へ、さらには「社会的な出来事」へ、というように抽象度が高くなるのが、1つの特徴である。PROGのリテラシーテストは、当然のことながら、文章検と重なり合うところが多い。一例を挙げると、4レベルにある「グラフから読み取れる客観的な事実を指摘することができる」あるいは「段階をおって論理をつなげることができる」などは、文章検の「資料から読み取れることを整理できること」および「文章の材料や要素を、文章の目的に応じた構成に配列できること」に相当するものであろう。

実際、このPROGテストのリテラシーレベルと、上記の第3回のテスト結果とを比較してみると、興味深いことがわかった。それは文章検3級で見た場合には、PROGテストのリテラシーレベル4がボーダーラインだということである。これは文章検の受験等級を決めるさいの、1つの目安になるものである。

下記の表は、学生ごとのPROGのレベルと文章検3級の合否判定の一覧表である。

第5表 PROGリテラシーレベルと文章検3級合格否の相関

No.	レベル	合否	No.	レベル	合否	No.	レベル	合否
30	1	否	12	4	合	4	6	合
③④	1	否	16	4	合	5	6	否
53	1	合	18	4	否	8	6	否
10	2	否	22	4	否	9	6	合
②③	2	合	29	4	合	11	6	合
⑭④	3	合	38	4	否	25	6	合
15	3	否	41	4	合	31	6	合
17	3	否	46	4	合	32	6	否
19	3	否	48	4	合	33	6	合
②⑩	3	否	54	4	否	37	6	合
②⑪	3	否	2	5	合	43	6	合
28	3	否	7	5	合	51	6	否
36	3	否	24	5	合	1	7	合
39	3	否	35	5	合	3	7	合
40	3	否	45	5	合	27	7	合
44	3	否	49	5	合	47	7	合
50	3	否						
⑤②	3	合						

※数字に丸枠がついているものは、以下で取り上げるモデルケースとなる学生を示している。

レベル5以上の学生で不合格であった学生もいる（No.5, No.32, No.51）。不合格の原因は、いずれも単純なミスであった。例えば作文を指示されたフォーム通りに書かず、段落を増やしたり、パラグラフのテーマを勝手に変えたりしたため、点数を落としている学生が多い。あるていど作文に自信のある学生にありがちな、ケアレスミスであるといっていいただろう。

他方、レベル3以下の学生で合格したものは少ない（18人中4人が合格）。よく見ると、例外的に、PROGリテラシーレベル1にもかかわらず、文章検3級に合格した学生が含まれている（No.53）。だが、この学生は、実際には、もう少しリテラシー能力が高い学生であると考えられる。PROGのレベルが能力より低く出ているアンダーアチーバーの事例であるといえるだろう。これほど極端ではないが、No.34も、結果がやや低めに出てしまっているきらいがある。

以上のことから、PROGテストレベル4が、文章検3級の合否を分けるボーダーラインだと考えられる。それを示したのが、第6表である。レベル3の学生は全体の構成比でいうと26%で、最も多い。本学の典型的な学生層と考えてもいいだろう。

第6表 PROGリテラシーレベルと文章検3級合格

リテラシー（50名）			文章検3級(50名)	
レベル	人数	%	合格	不合格
7	4	8	4	0
6	12	24	8	4
5	6	12	6	0
4	10	20	6	4
3	13	26	2	11
2	2	4	1	1
1	3	6	1	2

平均レベル4.3

合格率56%

しかしながら、2つのテストの結果をさらに注意深く見てみると、レベル3以下の学生の中にも、目覚ましい伸びを見せている学生がいることに気付かされる（No.14, No.52）。この2名がどのようにして合格することができたのかを明らかにすれば、リテラシーレベルが低い学生の向上モデルを作成することができるのではないだろうか。この2名の受験者を含めた向上モデルを確定するために、もう一度、詳しく、PROGテストと文章検の結果とを比較してみたい。すると、次の6名の学生がモデルケースとして選出できる。

その6名とは、No.14, No.20, No.21, No.23, No.34, No.52である。これらの学生は、すべてPROGテストがレベル3以下の学生で、しかも1

回目の試験の成績もよくない。つまり授業開始時において、日本語読解および作文能力のレベルが相対的に劣っていた学生である。そうした学生が、いかにして合格ないしそれに近い結果を出すことができたのか。それを考えることが次節での課題である。

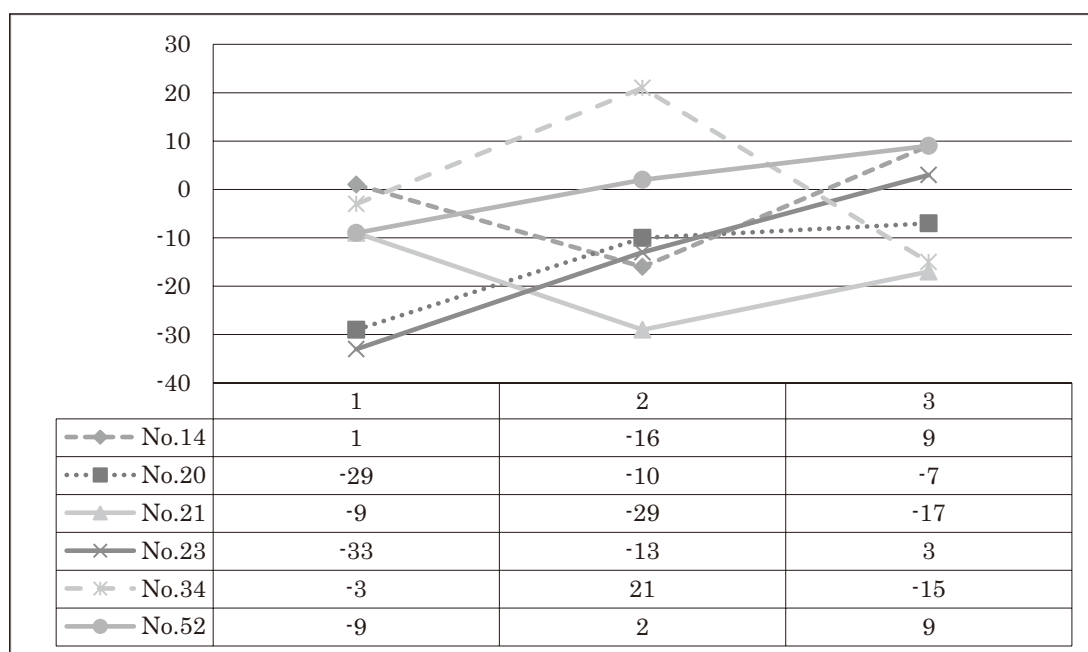
6. リテラシーレベル3以下からの国語力向上

下記の表は、3回の文章検テストの受験結果から、開講時のリテラシーレベルは低かったが、そ

の後、回を重ねるごとに、順調な伸びを見せた学生の設問別の点数の推移である（ただしNo.14およびNo.43は変則的である）。

まず、リテラシーレベル2ないし3からのスタートで、最終的に合格できたのは、No.14、No.23およびNo.52である。特にNo.23の学生はPROGリテラシーレベルが2からのスタートで、文章検読解の点数も、回を追うごとに上がっていった。

第7表 モデル6名の得点の推移



6名の文章読解力の変化

取り上げる日本語能力の向上モデルは、6名である（No.14、No.20、No.21、No.23、No.34、No.52）。No.14やNo.34は、やや変則的な変動を示している。特にNo.14に関していうと、第2回目の試験で、語彙と文法の問題を間違えて点数を落としている。それ以外の設問に関しては必ずしもリテラシーレベルが劣っているとは考えられない。しかし次節で俎上に載せる作文を見てもわかるように、No.14の作文能力は課題を残しているようである。

No.14 (PROGリテラシー3レベル、文章検3級 合格)⁴

	語彙	文法	表	パラ	合計	平均点
第1回	6	6	20	30	62	61.9
第2回	0	0	15	20	35	62
第3回	12	12	20	30	74	69

No.23 (PROGリテラシー2レベル、文章検3級 合格)

	語彙	文法	表	パラ	合計	平均点
第1回	6	12	10	0	28	61.9
第2回	6	12	0	20	38	62
第3回	12	6	20	30	68	69

⁴ 以下で掲示する6名の表のうち、「表」とあるのは、図表・グラフに関する設問を、パラはパラグラフの持つ意味を問う設問をそれぞれ意味する。

No.52 (PROGリテラシー 3 レベル、文章検 3 級 合格)

	語彙	文法	表	パラ	合計	平均点
第 1 回	6	6	20	20	52	61.9
第 2 回	6	12	15	20	53	62
第 3 回	12	12	20	30	74	69

以上は、すべてPROGリテラシーレベル 3 以下にも関わらず、文章検 3 級に合格した学生である。次にあげるのは、いずれも、わずかに合格点に足りなかったものである。しかし向上モデルという点では、たいへん参考になる。そこで、あえてここでは、取り上げることにした。そのモデルとなるのは、No.20、No.21およびNo.34の 3 名である。

No.20 (PROGリテラシー 3 レベル、文章検 3 級 不合格)

	語彙	文法	表	パラ	合計	平均点
第 1 回	6	6	10	10	32	61.9
第 2 回	0	6	15	20	41	62
第 3 回	6	12	10	30	58	69

No.21 (PROGリテラシー 3 レベル、文章検 3 級 不合格)

	語彙	文法	表	パラ	合計	平均点
第 1 回	6	6	30	10	52	61.9
第 2 回	6	6	0	10	12	62
第 3 回	6	12	10	20	48	69

No.34 (PROGリテラシー 1 レベル、文章検 3 級 不合格)

	語彙	文法	表	パラ	合計	平均点
第 1 回	6	12	30	10	58	61.9
第 2 回	0	12	30	30	72	62
第 3 回	12	18	0	20	50	69

この 3 名は、必ずしも読解で高得点を取れているわけではない。また特に後の 2 名については、必ずしも読解の得点が順調に伸びているわけではない。にもかかわらず、意見文の作成において、高い得点を得ることができたために、総合点としてはかなり健闘したことがうかがえる。そこで以下では、この 2 名を含む、モデルとなる 6 名すべての意見文を検討することにした。

7. 意見文から見た 6 つのモデルケース

文章検の設問および 6 名の解答は、下記のとおりである。あわせて必要に応じて第 2 回目の意見文、あるいは第 1 回目および 2 回目の両方の意見文を、適宜、取り上げて比較の素材としたい。各回の意見文の問題には、作成に当たっての条件が付されている。それを最初に示しておこう。

意見文の問題と条件

第 3 回目の問題 (2016年 7 月 26 日実施)

クラス・部活動・委員会などのメンバーに自己紹介をして、相手に良い印象を与えたいと思うときがあります。そのとき、「自分の趣味や特技を積極的にアピールするのがよい」という意見と、「積極的にアピールしない方がよい」という意見があります。どちらかの立場に立って、意見文を書きなさい。次の条件を守ること。

条件 1 意見文は、次の順番で三つの段階に分けて書くこと。

第一段落 出来事・体験・知識を述べる。
自己紹介のときの「趣味や特技のアピール」について、あなたの意見を支える出来事・体験・知識を述べる。

第二段落 意見を述べる。
趣味や特技について、「積極的にアピールするのがよい」か「積極的にアピールしない方がよい」のどちらか、意見を明確に述べる。

第三段落 意見の理由を説明する

条件 2 1 行 25 字のマス目に縦書きで、必ず 16 行以上、20 行以内で書くこと。句読点も 1 字として数える。句読点が行頭にきたときは、前行末欄外にうってよい。

注意 行数不足または行数超過の場合は採点の対象とはなりません。

第 1 回目の問題 (2016年 4 月 7 日実施)

「中学校に制服はあった方がよい」という意見と「中学校に制服はない方がよい」という意見があります。どちらかの立場に立って、意見文を書きなさい。次の条件を守ること。

〔※ 条件は省略〕

第 2 回目の問題 (2016年 6 月 2 日実施)

「年賀状は出す方がよい」という考え方と「年賀状は出す必要はない」という考え方がありますが、あなたはどちらの意見に賛成ですか。どちらかの立場に立って、意見文を書きなさい。次の条件を守ること。

〔※ 条件は省略〕

No.14が作成した意見文

No.14 第3回目

□私は、恥ずかしがりやで人と話すことが苦手です。特にみんなの前で話すのはとても苦手です。新しいクラスになるとクラスみんなが一人ひとりずつ発表することがあります。その時に、みんなは趣味や特技などを言って自己紹介をしています。自己紹介で趣味や特技など言うことでみんなにアピールすることでその人の良さがわかりやすい。ですが私はみんなの前で自己紹介するときは名前だけである。

□私は自己紹介の時には積極的にアピールしない方がよいと思う。

□みんなの前でアピールすることはとてもいいことだと思うが逆に偏見をもたれたり、差別につながることもあるかもしれない。だがそれを知ってアピールすることで何か自身にとって良いスキルになるかもしれない。

□だが、みんなの前で発表することが苦手な人にはやめたほうがよいと思っているのである。苦手な人が発表することで悪く影響してしまうからだ。

(379字)

採点結果45点 (70点満点)

段落構成：条件通りではありません。
出来事・体験・知識：適切に述べられています。
意見：明確に述べられています。
理由の説明：説明不足です。
論理性：文章全体が論理性の点で不十分です。
表記・表現：誤字・脱字、文法などに誤りがありました。

No.14 第2回目

□私は毎年、友人に年賀状を書いて出している。年賀状を出した友人から年賀状が来た。その時、私はとても嬉しいかった。ある友人は、連絡を取るのが難しい友人で6年間くらい会って話をしなくて電話もかけてなかった。その友人から年賀状がくるとひと一倍嬉しく感じる。なので私は毎年、年賀状を書いて友人に出している。

□なので私は年賀状を出した方がよいと思う。

□なぜならば、私には2つの理由があるからである。

□一つ目は、文書を書く力、そしてきれいに書く練習にもなるからである。今はスマホが普及してみんなスマホを使いコミュニケーションをとっており文書を書く力が失われてくるからである。

□二つ目は、書くことで気持ちを伝える大切がわかることである。人に気持ちを伝えるなら会って話をするか手紙を書いて伝えることが一番だと思うからである。

□書く力、そして伝える力は社会にとって必要なことであるので今のうちに力をつけたいと私は思っている。

(403字)

No.14についていうと、終始、パラグラフの決まりを守っていない。これは講義中での指摘を聞いていないことを意味する。実際、提出しても

らった「講義・宿題ノート」(資料5)を見ても、授業中、あるいは授業外学習での記録は少なかった。レベル3からの合格ということで、あえて取り上げることにした。しかし、もし同程度の試験をもう一度課したとしても、はたして合格できるかどうかは不確定である。

No.20が作成した意見文

No.20 第3回目

□私は、高校生の時に新しいクラスメートが増えた時、話をしたかったが話しかけることができなかった。話す内容も、きっかけも何もなく仲良くすることができずに悩んでいた。私は、努力をして話しかけにしようと思ったが、話すことはできなかった。やはり、共通する話題などが無いと話することはできないのだろうか、その時の私は思った。

□その出来事から私は、自己紹介の時は自分の趣味や特技を積極的にアピールするのがよいと考える。

□なぜなら、会話をする時は、話題が無いと困る。しかし、互いに共通する話題なら困ることは無いと考える。自己紹介の時に、趣味や特技を話しておけば、自分が何が好きなか相手に理解してもらえるため、話題がいくつかできるだろう。また、自己紹介で互いの趣味が合う可能性が生まれ、自己紹介をきっかけにして相手と仲良くすることができるのではと私は考える。最初に自分のことをしてもらえると今後のコミュニケーションにも困ることはないと思う。積極的にアピールすることは社会の中で必要とされるため大切なことだと思う。

(451字)

採点結果60点 (70点満点)

段落構成：条件通りに述べられています。
出来事・体験・知識：具体性に欠けます。
意見：明確に述べられています。
理由の説明：適切に述べられています。
論理性：文章全体が論理性の点で不十分です。
表記・表現：誤字・脱字、文法などに誤りはありませんでした。

No.20 第2回目

□近年、スマートフォンが多く利用されていて、なんでもスマートフォンを使用して出来るようになった。ゲームや電話・メール・SNSなどの事に使用されている。最近ではメールで誕生日を祝ったり、メールで新年のあいさつをする人が多くなった。

□これらのことから私は、年賀状を出す必要はないと考える。

□なぜなら、毎年のようにパソコンで年賀状を作成したり、年賀はがきを買ってきたりと年賀状を出すまでの時間がかかり過ぎているからだ。自分の持っているスマートフォンから年賀状を作成してメールで送信するのとパソコンで作成して年賀状を出すのではスマートフォンの方が早く、また、一度に多くの人にメール

で出すことが出来るというメリットがある。他にも、あまり多くのお金を使用することがなく安あがりにもなる。作成する側、受け取る側の人の負担が少なくすることもできる。さまざまな物がデジタル化している今、このようなやり方が合っているのではないか。

(403字)

講義中の説明をよく聞き、設問の条件をよく守っていることがよくわかる答案である。講義中のノートの記録も申し分がなかった。また、授業後に疑問点を必ず聞きに来たのも、この学生である。授業態度も良好であった。読解の点数がいまひとつ伸びずに不合格となった。この学生は、次のNo.21の学生と常に同じ机を共有して、熱心に講義に耳を傾けていた姿が印象に残った。

No.21の意見文

No.21 第3回目

□私は大学に入った当初、友達に私のことを知ってほしいために、趣味や特技を積極的に話をしたことがあります。その時友達と趣味が共通したり話の話題が来て、お互いの距離縮まってすぐに仲良くなることができました。やはり自分のことを知ってくれるためにはアピールをしないと相手も分からないと思います。

□なので私は、積極的にアピールするのがよいと思います。

□自分からアピールしないと何も始まらず、何を話したらいいのか分からなくなると思います。共通の趣味が見つかった時の喜びは高いし、お互い共有できて分かち合えることもできます。言わないで後かいするより言って後かいした方がよいです。積極的にアピールすることで相手も自分のことを分かってくれる様になり、話題を出したりして話かけやすい存在にもなり交友関係も良くなっていくと思います。

(356字)

採点結果60点 (70点満点)

段落構成：条件通りに述べられています。
出来事・体験・知識：具体性に欠けます。
意見：明確に述べられています。
理由の説明：適切に述べられています。
論理性：文章全体が論理的に述べられています。
表記・表現：誤字・脱字、文法などに誤りがありました。

No.21 第2回目

□私は中学生の頃、部活友達に年賀状を貰った事があります。皆手書きで可愛くデコっていて、それ以来私は年賀状を貰う事が好きになりました。心のこもった字や絵を見ると嬉しいです。けど高校や大学に入ると絡む機会も少くなり年賀状が届く事が減って悲しくなりました。

□なので、私は年賀状は出す方がよいと思います。

□皆が今どんな様子で暮らしているのか、元気で過ごしている確認もできていいと思います。手書きで手紙などハガキを貰うのはめったにあることではないし、昔あの人はこんな事を想って書いたなど、それきっかけで話したりして話す機会を作れるのでいいと思います。口で言ったら忘れるけど、手紙だったら残って素直に書いてるのでいいと思います。年賀状をコピーで作ったりする人もいますが出さないよりはましだと思いますが、出来れば私は手書きで書いてもらった方が相手には嬉しいと思うので結果的には出した方がいいと思います。

(397字)

2回の作文を比べて、口語表現や誤字が散見されるが、減る傾向にある。形式としては、パラグラフをよく意識し、それなりにまとまりのある文章を書けている。上記の通り、この学生は、毎回No.20と隣り合わせで座って、互いに刺激をうけながら講義を受けていたといえるだろう。読解にやや難点があり、合格とはならなかった。だが、意見文作成に関しては、申し分ない結果であったといえる。

No.34の意見文

No.34 第3回目

□私は、小学校の頃からバスケットボールをしており、高校からは陸上部に入った。私は見た目や性格から文化部に間違えられる。なので運動部に入っていたという必ずみんなに驚かれる。

□私は自己紹介の時に自分の趣味や特技を積極的にアピールするのがよいと思う。なぜなら、その趣味や特技からはじめて会った人との話題ができ、共通の趣味や特技をもった人にさらに出会うことができると思うからだ。また、私のように、おとなしくて運動部には見えない人が意外にも運動部だったりすると相手にインパクトを与えることができ、すぐに人に名前を覚えてもらうことができるかもしれない。

□趣味や特技をアピールすることは少し自慢に聞こえたり、人に自分だけの趣味を話したくないという人もいるかもしれないが、私は趣味や特技を話すことによって、自分にきょうみをもってもらえると思う。

(365字)

採点結果60点 (70点満点)

段落構成：条件通りではありません。
出来事・体験・知識：適切に述べられています。
意見：明確に述べられています。
理由の説明：適切に述べられています。
論理性：文章全体が論理的に述べられています。
表記・表現：誤字・脱字、文法などに誤りはありませんでした。

No.34 第2回目

□私は毎年、年賀状を友達に出しています。私も友達から年賀状がくるのが楽しみです。私は高校生のときに陸上部に入り、毎日の練習をがんばっていました。毎年、十二月二十五日から十二月三十日まで合宿がありました。なので、合宿から疲れて帰ってきて、一月一日に友達から年賀状が届くと合宿の疲れもふつとぶくらしい元気になりました。年賀状は人と人をつなぐだけでなく、自然と元気をもらえるものだと思います。□年賀状は書く手間や十二月二十五日までに出不さないと一日には届かないなどという面どくささがあり、簡単なSMSですませてしまう人もいますが、私は年賀状は出したほうが良いと思います。なぜなら、手間がかかっている分、新年を向かえることができた喜びと新年もがんばろうという気持ちが伝わるからです。SMSはその気持ちも伝わらないし、そのメッセージが一生残ることは無いと思います。なので私は年賀状は出したほうが良いと思います。

(400字)

No.34 第1回目

□私は中学校に制服はあった方がよいと思います。理由は、中学校は勉強だけでなく、社会に出るための協調性などを身に着けるために行くので、集団行動を身につけるためにもよいと思います。また、どこかで問題行動をしていたら、どこの生徒かもわかるので学校が注意や指導をしやすいし、逆にいいことをしていたら、その中学校が評価されると思います。まだ、中学校といっても大人ではないので、自分の行動に責任をもったりすることができないので、周りの方々から見守っていただき、協力して少しずつ大人に成長していけるのではないかと思います。しかし、中学校の制服は家計の負担になるので中学校に通えない方もいらっしゃると思います。だからこそ、年上の方から制服をゆづってもらったり、国からの補助をもらったりするなど、周りの方に支えてもらいながら学校に通うのも一つの勉強になり、感謝の気持ちや社会貢献の気持ちが芽生えてくるのではないのでしょうか。なので、私は中学校に制服はあった方がよいと思います。

(434字)

第1回目、第2回目、第3回目と、しだいに条件通りに作文できるようになっていった形跡がうかがえる。第3回目の2段落目「なぜなら」以下を3段落目に移動させたら、ほぼ問題のない意見文が完成する。今回は、図表の読解での失点が多く、不合格であった。

No.23の意見文

No.23 第3回目

□私は、中学生の頃に自分の趣味や特技について紹介をしたことがあります。そこでは、クラスメイトがしっかりと聞いてくれてとてもうれしかったです。し

かし、ここで発言したことがきっかけとなり少しイジメにあいました。それは、特技を見せてと言われやって失敗したときに、「こいつは嘘しかつかない」と言う言葉をいじめを受けました。

□私は、「積極的にアピールしない方がよい」に賛成である。

□なぜなら、相手に良い印象を与えるにはとてもいい機会になり、うまく物事が進んだように思えるが、この紹介をして特技を見せてよと言われた時に失敗すると、私のように「コイツは嘘しかつかない」と言われ言葉でのイジメにあうことが多くなると私は考えるので、「積極的にアピールしない方がよい」という考え方に賛成である。

(337字)

採点結果50点(70点満点)

段落構成：条件通りに述べられています。

出来事・体験・知識：適切に述べられています。

意見：明確ではありません。

理由の説明：説明不足です。

論理性：文章全体が論理性の点で不十分です。

表記・表現：誤字・脱字、文法などに誤りがありました。

No.23 第2回目

□私は年賀状は出す方がよいに賛成でもあり反対でもあります。

□なぜなら年賀状を出すことによって遠くに往んでいる人が元気かどうかちゃんとくらべているかなど知ることもできますし、いろいろな人から一人一人違う年賀状が来ることによって毎年毎年が楽しくなると思うのでそういった部分では賛成です。しかし、反対な部分もあります。私の母は保険会社で働いているのですが、毎年たくさんのお客様の年賀状を書いていて、その中で去年は年賀状が来たのに今年は来ていないなどと電話がかかってくることも多くあります。そのようなことには反対です。

□このような内容から年賀状はお礼の意味をこめておくったり元気かどうかを知るために送るものだと思うのでそのようなことには賛成ですが、その中でも年賀状が来てないといって電話などがきたりすることについては反対の意です。

(364字)

No.23 第1回目

□私は中学校に制服はあった方がよいと思います。まず一つ目に服を選ばなくていいことです。二つ目に制服を着ている事により学校全体が一体化して集団意識がうまれると思うからです。

□私は今、大学に通っています。そのため中学校・高校とは違い明日の服や今日の服を着て行こうか考える時間が必要です。しかし、中学校・高校は学校で決められている制服があり、何を着て行こうか考える必要がないので制服は大事だと思います。

□私が通っていた中学校・高校では、ちゃんとした制服がありました。しかし、時に制服をちゃんと着ずに

だらしないう格好で来る生徒もいました。その時は、先生がしっかり指導したり何らかの罪を与えたりしていました。しかし、大学では違います。一人一人何を着てもいいし、大人という事だからと思います。なので制服を着ている時は何かしばられているように感じますがその一つ一つが大人になっていくために必要だと思うので制服はあったほうがいいと思います。

(411字)

第1回目、第2回目と比べると、だんぜん良くなっていることがわかる。しかし、それでも条件にしたがって書かれているとはいえない。第3回目についていうと、2段落目には文頭に「以上のことから」などの言葉を補うことができれば、それなりに形式通りのものとなったであろう。また3段落目は、より短文にするなどの工夫が必要である。そうすることで、文意が通りやすくなるだろう。PROGリテラシーレベルという2レベルからのスタートとしては、かなり学習効果が上がっている。

No.52の意見文

No.52 第3回目

□私は中学生のクラス替えの時、仲の良い友人とクラスが離れた。新しい友人が出来るか不安だったが、自分から積極的に周りに声をかけ趣味などをアピールしたことでクラスにも、なじむことができた。
□この経験から私は、自分の趣味や特技を積極的にアピールするのがよいという意見に賛成である。
□人間関係を築くうえで重要になるのがコミュニケーションであり、どのような性格なのか、どのような趣味をもっているのか分からない相手と仲良くなろうとすることは難しいことである。だからこそ自分から積極的に趣味や特技をアピールすることで、コミュニケーションをとるための、きっかけをつくることができ、そして自分がどのような人間なのかということを知ってもらうことができる。そうすることで相手から関わりやすくなり良い印象を与えることができると思う。これから先仕事などで、新しく人間関係を築く際にも積極的に自分の趣味や特技をアピールすることで、よりよい関係を築くことができるため、私は自分の趣味や特技を積極的にアピールするほうがよいという意見に賛成だ。

(455字)

採点結果65点 (70点満点)

段落構成：条件通りに述べられています。
出来事・体験・知識：適切に述べられています。
意見：明確に述べられています。
理由の説明：適切に述べられています。
論理性：文章全体が論理的に述べられています。
表記・表現：誤字・脱字、文法などに誤りがありました。

No.52 第2回目

□お正月の楽しみの一つとなっている年賀状だが近年、年賀状が届く枚数が減り、そのかわりにSNS上で新年を祝うメッセージを送り合うことが増えた。私はSNS上での新年のメッセージを送り合うことにどこかさびしく物足りなく感じる。

□この経験から私は「年賀状は出す方がよい」という考えに賛成である。年賀状は相手のことを思い一枚ずつ手書きで書くものであり、普段会うことができない人とも年賀状を送り合う事で、互いの近況を知ることができ、また縁を長く続かせる為にも、この年に一度の年賀状は必要不可欠である。

□またSNS上でやりとりをしたほうが手取り早くスムーズにやりとりできるのではないのか、という考えもあるが、やはり自筆で心を込めて書いた年賀状と字を打つSNSと比べると気持ちの伝わり方は断然に年賀状であり、またSNSを利用できない世代の方にも幅広く利用することができるのは年賀状である。以上の理由から私は「年賀状は出す方がよい」という考え方に賛成である。

(411字)

No.52 第1回目

□私の中学校の制服は、一般的な制服で他の学校が付けている「校章」もないような普通の制服である。しかし、自分の学校を示す物が無い制服のため、試験を受ける時に「どこ中学ですか。」と聞かれ、あまり良い気持ちはしなかったという経験がある。

□私は、中学校の制服はない方がよいと考える。なぜなら制服があることで生徒が個性を表現しにくくなっていると考えているからである。先に述べた経験で「あまり良い気持ちがしなかった」と感じたのは、おそらく個性を表現できていないことに不満があったからではないかと思う。仮に制服がなく、私服で生活をするようになると、大体の生徒が自分の個性を表現して生活することが出来るのではないかと考えている。

□したがって、生徒がそれぞれ自分の個性を表現して学校生活を送ることが出来るようにするためには、中学校制服はない方がよいと私は考える。

(372字)

No.52は、比較的1回目から、内容のしっかりした作文を書いている。しかし、回を重ねるごとに、パラグラフの意味を考えながら書けるようになっていくことがわかる。実際に、記述式のアンケート（資料4）でも、そのことが触れられている。

なおNo.23とNo.52の講義中、あるいは他の講義への取り組み姿勢に関して印象に残っていることがある。それは、この2人のまわりには、常に学力の高い学生がいて、わからない箇所を質問する相手となっていたということである。No.23にはリテラシーレベル5のNo.49が、No.52には同レ

ベル 5 のNo.45やレベル 6 のNo.25が、そばについていた。レベルが上の学生を見ながら自らの学力をあげていったことが予想される。これらのサポート役をはたす学生が、上述のNo.20とNo.21の間にいたならば、これらの学生も、今よりもさらに良い学びとなったのではないと思われる⁵。

まとめ

本講義のスタート地点で、必ずしも成績上位者でなかった学生が、同等あるいはそれ以上の学生と比べ、好成績を収めることができた理由は何であろうか。主たる理由としては、下記の三点を挙げることができる。

第1に、毎回の講義内容をノートに記し、宿題を行ったこと。成績上位者は、特に講義中のノートや宿題を提出しなくとも高得点を得られた。しかし中レベルないしそれ以下の学生で記録を怠ったものは、成績に繋がらなかった。逆に、レベル3以下の学生でノートをとっていない事例も見られる。これらの学生が好ましい結果を出していない場合には、ノートをとることの意義から教えていく必要がある。

第2に、記述式のアンケートからうかがえる特徴として、自らの力が伸びているかを的確に述べるができる、という点を挙げることができる。可否に限らず、力をつけている学生は自覚的にそのことをアンケートに答えている。

第3に、学力の低さを、いわゆるコンピテンシー（PROGテスト）により克服するという事例がみられた。あるいは、学修をサポートしてくれる知人の存在が、国語力の伸びにつながっていたようである。国語力は他の科目の基礎となることに疑いはない。しかし他のとりわけ実践的な科目（CSLなど）が、逆に国語力を高めようとするモチベーションにつながっていた可能性を示唆するものである。

以上の三点から、対象となる学生層に対しては、課題と宿題の徹底、弱点の可視化、そしてピアラーニングの導入が、学力向上に必要な学修サポートであることが明らかとなった。

同時に、今後の課題として下記の2点が浮上してきた。最後にこの課題を述べることで、むしろのことばとしたい。まず課題の1つとして、より

ジェネリックな学生の能力を把握していくためには、他の科目のテストとの連動性を考慮に入れなければならない、ということが挙げられる。そのためには、本稿でも取り上げたPROGテストのみならず、さしあたり本学でも導入している「英語」科目のCASECテスト、あるいは「ICTスキル」科目のCS検定などが、比較検討に加えることが必要である。2点目に、授業改善に関する課題としては、下記のことをいえる。すなわち選択肢式のアンケート調査（資料3）からわかったこととして、学生の認識としてスキルが上昇しているという感想を持っているが、反面、文章を書くことへの意欲や関心は、必ずしも高まったとは言えないことがわかった。これについては、書くことそれ自体に意義を見出せるような、何らかの工夫が必要であると思われる。

【参考文献】

- 小田玲子, 2013, 「大学初年次ライティング・ポートフォリオ実践における初期段階の知見―プロセス重視のアプローチの有効性」『工学院大学研究論叢』(50-2), 35-50ページ.
- 笹川篤史, 2015, 「PROGテスト問題を利用したりテラシー向上分析について」『経営と経済』(長崎大学経済学会) 95(1・2), 239-253ページ.
- 島谷浩, 2013, 「英語外部テストを利用した単位認定の妥当性と波及効果」『熊本大学教育学部紀要』第62巻, 81-90ページ.
- PROG白書プロジェクト編, 2016, 『PROG白書 2016 現代社会をタフに生き抜く新しい学力の育成と評価―2020年大学入試改革を見すえて』学事出版
- 美馬のゆり, 2008, 「学習環境の構築と運用」, 佐伯 胖監修『学びとコンピュータハンドブック』東京電機大学出版局, 26-29ページ.
- 山下功, 2013, 「大学初年次教育における作文の試行事例」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』16, 97-103ページ.
- 山本啓一, 松本幸一, 2013, 「PROGテストと初年次文章表現科目によるジェネリックスキルの測定と育成」『九州国際大学法学論集』19(3), 51-62ページ.

⁵ この4名の事例は、複数の人間がともに学び合うことで、深い理解につながる、学びの「共同性」(美馬のゆり, 2008)を示唆する、興味深い事例である。

添付資料

資料1 日本語リテラシー関連シラバス

	日本語リテラシー A	日本語リテラシー B	基礎演習 I A
第1回	・オリエンテーション ・第1回テスト	テーマ：本や資料を読む①	①自己紹介、前期の履修登録、時間割作成
第2回	・テスト解答・解説	テーマ：本や資料を読む②	②個別面談（学生プロフィール作成、学習・生活面・キャリア支援面の状況など）
第3回	・文章の種類を知る	テーマ：本や資料を読む③	③大学生生活のデザイン（4年間の履修目標の設定、キャリアデザインなど）、学習・生活指導・キャリア支援面の支援計画の作成
第4回	・意見のある文章（意見文）を書く準備をする	テーマ：本や資料を読む④	④【学部1、2年全体】 基礎演習 I・II 合同ゼミ 1年生（基礎演習 I の学生）は2年生のビブリオバトル（学内限定）を見学する
第5回	・意見文の型を身につける	テーマ：自分の意見、考えを書く①	⑤【学部1年全体】PROG解説会
第6回	・実際に意見文を書いてみる	テーマ：自分の意見、考えを書く②	第6回～第10回 ※第5回～第10回までは、 ①学科別に共通事項を定め、 ②ゼミ別に講義内容を作成する。 これらの講義に含まれる内容としては、以下の通りである。
第7回	・書いた意見文を声に出して読んでみる ※プレゼンの準備	テーマ：自分の意見、考えを書く③	
第8回	・第2回テスト	テーマ：自分の意見、考えを書く④	
第9回	・中間試験の振り返り	テーマ：自分の意見、考えを伝える① 【学部合同授業】（プレゼン）	(1)【学部全体】 PROGテスト結果の解説 (2)本講座の終了時まで、必要に応じて、再度個人面談を実施する。
第10回	・意見文に対する批判を行う	テーマ：自分の意見、考えを伝える②	
第11回	・意見文への批判に反論する	テーマ：自分の意見、考えを伝える③	⑪【学部1、2年全体】 基礎演習 I・II 合同ゼミ ※1年生（基礎演習 I の学生）は2年生のビブリオバトル（本選学内予選）を見学する。
第12回	・手紙の書き方	テーマ：自分の意見、考えを伝える④ 【学部合同授業】（ディベート）	⑫【ゼミ別】 企画プログラム「ビブリオバトルに参加してみよう」をゼミ別に実施する。
第13回	・手紙の表現を知る	テーマ：自分の意見、考えを伝える⑤	⑬【学科別】企画プログラム「ビブリオバトルに参加してみよう」を学科内のゼミ合同で実施する。
第14回	・手紙文を書いてみる	テーマ：自分の意見、考えを伝える⑥	⑭【学部1年全体】 企画プログラム「ビブリオバトルに参加してみよう」の成果発表を3学科合同で実施 ※前期成果発表会を兼ねる
第15回	・総括・全体の振り返り 【まとめ問題】	テーマ：「読む」力、「書く」力、「伝える」力のまとめ	⑮前期のまとめと振り返り、後期の目標設定
	第3回文章検テスト（IPテスト）	→ 矢印は意見文作成からプレゼンテーション・ディベートへの発展を意味する	

資料2 賛成および反対のディベートフローシート（記入例）

ディベートフローシート(賛成側)

賛成側の主張

年末に年賀状を書いて出すことに賛成である

(1) フローシートに使い分析する

(2) 枠内の論に対し、質的、量的、確率などをもとに指摘を行う

反対側の反論(1回目)

賛成側の反論(1回目)

反対側の反論(2回目)

賛成側の反論(2回目)

内因性

[ヒント]出さないで・・・
①気持ちが伝わらない
②人とコミュニケーションが取れない

⇒

①形式的に出しているのではないか(気持ちはない)

重要性

[ヒント](内因性)だけでなく・・・
①礼儀やマナーに反すると思われる
③人間関係が悪くなる

⇒

①目上のひとに気を使いすぎではないか
③年賀状が来ないぐらいでこじれてしまう関係などいらない

解決性

[ヒント]出すことで・・・
①自分もうれしいし、相手を書けることできる
②互いの安否を確認できる
②字を覚えることにもなる

⇒

①相手が喜んでいて、どうして分かるのか
②ほかに手段があるのではないか

ディベートフローシート(反対側)

反対側の主張

年末に年賀状を書いて出すことに反対である

(1) フローシートに使い分析する

(2) 枠内の論に対し、質的、量的、確率などをもとに指摘を行う

賛成側の反論(1回目)

反対側の反論(1回目)

賛成側の反論(2回目)

反対側の反論(2回目)

発生過程

[ヒント]出すと・・・
①年賀状を出すには金がかかる
②書くのに時間がかかる

⇒

①気持ちはお金では買えない
①②時間とお金がかかるからこそ嬉しいと感じる

深刻性

[ヒント]それだけでなく・・・
①現代ではPCやプリンターやデジタルカメラなども必要となる
②送り返さないで気まずくなる

⇒

②年賀状は送ることのほうに意味がある。
②だからこそ出したほうがいい。

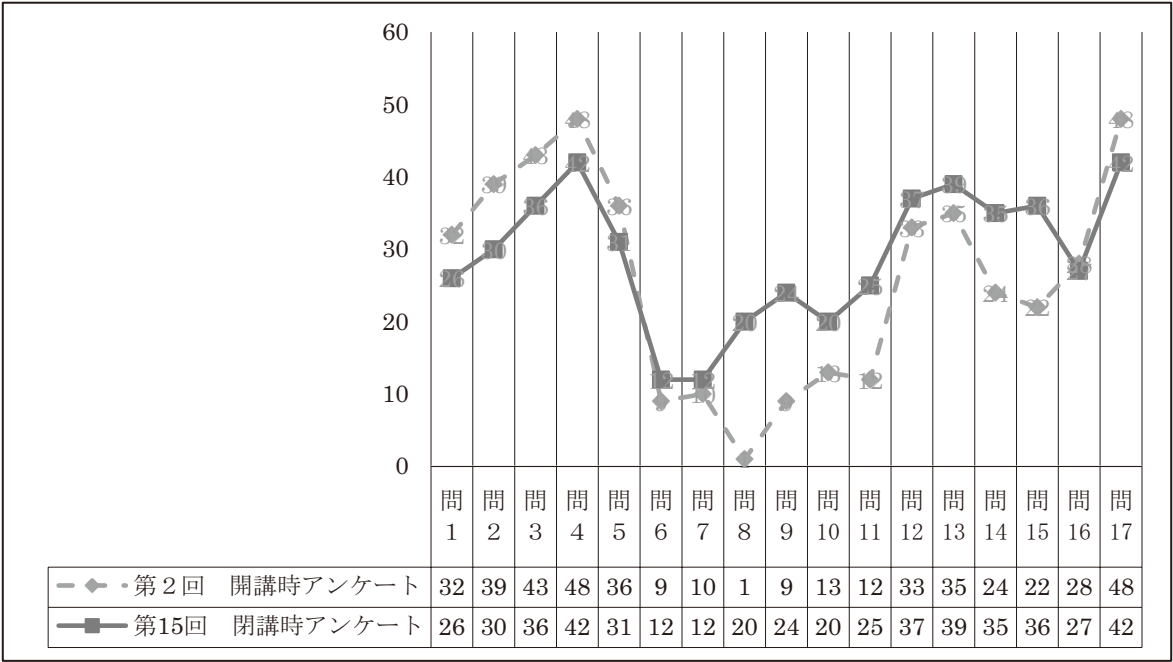
固有性

[ヒント]そもそも出さなくても・・・
①出さなかったからといって困ることはない
②SNSやメールでも気持ちは伝わる

⇒

②手書きの文字だから気持ちが伝わる。
②SNSやメールで気持ちは伝わるでしようか。
②データがなくなる可能性がある

資料3 選択肢式アンケート（開講時・閉講時）の質問項目とその結果



- 問1 本を読むことは好きですか？
 問2 マンガを読むことは好きですか？
 問3 映画を見ることは好きですか？
 問4 音楽を聴くのは好きですか？
 問5 インターネットで情報を検索するのは好きですか？
 問6 文章を書くことは好きですか？
 問7 手紙を書くことは好きですか？
 問8 正しい文章が書けていると思いますか？
 問9 語彙は多いほうだと思いますか？
 問10 漢字を覚えているほうだと思いますか？
 問11 話し言葉、書き言葉を使い分けられますか？
 問12 誤字・脱字には気を付けていますか？
 問13 他人が読んでわかる文章を書こうと心がけていますか？
 問14 内容を考えて段落分けを行っていますか？
 問15 意見の文章と感想の文章の違いがわかりますか？
 問16 円グラフ、棒グラフ、表などから情報を読み取ることができますか？
 問17 文章作成が上手になりたいですか？

資料4 記述式アンケート（抜粋）

No.14の振り返り

- 手紙の書き方の授業がためになった。
- 誤字が減った。漢字が書けるようになった。

No.20の振り返り

- 手紙文の授業がためになった。
- 語彙力や文章作成力がついた。
- 段落や漢字に気を付けるようになった。

No.21の振り返り

- 手紙の書き方、言葉の選び方、接続詞を考えながら書く、段落分けなどがためになった。

No.34の振り返り

- 恥ずかしいぐらい間違った日本語を使っていたことに気が付いた。
- これまで文の構成の仕方が分かっていなかった。

No.23の振り返り

- 感想と意見の違いが分かるようになった。
- 文章を書くのが苦手だったが、書くことが好きになった。

No.52の振り返り

- 今まで段落分けなどが上手くできなかったのですが、講義を受けてからは段落分けなどできるようになったり、接続しなどを意識するようになった。
- 敬語の基本知識の講義がためになった。

資料5 「講義・宿題ノート」とその記録状況

本講義では、「講義・宿題ノート」を配布し、講義中に話したこと、授業時間外授業で学んだことを書いてもらうようにして毎回提出してもらった。講義ノートの箇所には、講義中に話した内容をメモしてもらった。また宿題ノートの箇所には、授業時間外学習として、自分が知らなかった漢字の読み書き、語彙や慣用句などの一覧表を作成してもらった。その結果、PROGテストのリテラシーレベル3以下のもので文章検合格ないしその水準に達したものは、詳細なノートをつけていたということが判明した。逆に、リテラシーレベルが高い学生は、ノートの記録があまりない学生でも合格している。ただしリテラシーレベルが高いにもかかわらず合格できなかったものは、例外なくノートの記録が不十分であった。なおNo.52はリテレベル3で合格した学生であるが、本「講義・宿題ノート」への記録は少なかった。

講義・宿題ノートの得点

	リテレベル	合否	点数	ノート(12点満点)
No.14	3	合	144	4
No.20	3	否	133	12
No.21	3	否	138	9
No.23	2	合	148	9
No.34	1	否	135	7
No.52	3	合	169	4

<p>日本語リテラシー 宿題ノート</p>	作成：吉野
-----------------------	-------

日本語リテラシー

宿題ノート

担当：吉野 浩司

※ 毎回忘れずに持ってくること(忘れた場合は宿題未提出とみなす)

※ 単位認定の際に参考にするのでなくさないこと

学籍番号：

氏　名　：

学　科　：

メー ル：

1

	第 回 講義内容
--	----------

○今日の講義であなたが学んだものは何ですか。
また、講義内容について、あなたの感想や質問、
意見などを自由に記入してください。

.....

2

<p>日本語リテラシー 宿題ノート</p>	作成：吉野
-----------------------	-------

提出用宿題

（１）漢字の読み方（読めない、書けない漢字）

No.	漢字	よみかた
1		
2		
3		
4		
5		

（２）わからない語句・慣用語

例	漢字	よみかた
例) 異口同音	例)いろいろな人から同じ意見がでること	
例) 全ての学生が、異口同音に彼の意見賛成する		
1		
2		
3		
4		
5		

3

	日本語リテラシー 宿題ノート
--	----------------

○今日の講義であなたが学んだものは何ですか。
また、講義内容について、あなたの感想や質問、
意見などを自由に記入してください。

.....

2

	（３）問題と答えを作る
--	-------------

問	答
問題例	「夕食(yūshoku)」をとるはかいはいのほどうしてか
解答例	大学の食堂とは違う方向の国立図書館に行くため。
問題1	
答え1	
問題2	
答え2	
問題3	
答え3	

4

①